ふかまちのまど

第一二三号　九五年　三月一日

亡き母を忍んで

福島公子

母の突然の永眠に、私たち家族は大変驚きました。そして大きな大切なものを失いました。深町の皆様には生前中は格別のご懇情を賜りまして厚くお礼申しあげます。

二月初旬に原稿用紙をいただいて、変わり行く深町の事を少しづつ書きとめていましたところ、このような次第で、内容も見失ってしまいました。

二八年間の母　友江との出逢いと、想い出ばかりが淋しい日々の心の慰めでございます。

明治の女性として、しっかりと自分自身にも厳しく自己の生き方を確立した人でした。嫁の私を娘のように労ってくれ、一日家事も一つづつ丁寧に教えてくれました。朝夕、母の声が確かに聞こえ、その通りにしています。

この春、孫達が同居することで喜び、曾孫の子守をしたいと楽しみにしていました。

孫の教育は一手に引き受け、私は産みの母で孫の教育は、友江さんでした。

学校から帰る子どもを待ち受けて、ランドセルを開け、遊ぶ前に宿題をさせ、鉛筆をナイフでけずり、読み・書き・そろばんが大事と一生懸命に学習する子に心を込めて、ほめては叱り、と、小学校の間は大変な努力をしてくれました。

私は逃げ腰の三人に「ジイチャン・バアチャンの言う通り」と、言い続けただけでした。我が子のように、それ以上熱心に育ててくれた母を尊敬しています。私自身、これ程の熱意を孫にかけられるでしょうかと、自信もございません。

家の長老が、全ての営みを理解して、リーダーとして八六歳迄やりきり、沢山の教訓を家族に残してくれました。

深町のたくさの方々より、母はいつも声をかけていただいて親切にしていただきました。

厚く御礼申しあげます。▲▲

「校舎と共に」（三）

―聖光庵が教室でした―

石井哲代

昭和二六年三原市に合併しました。が、ぬくもりのある平屋の校舎も、自伸学習も、秋祭りの午後の校内相撲大会も、春・秋の農繁休みも健在でした。二八年いよいよ校舎新築となり、明治後期の校舎は取り壊わされました。分散授業がどのように行なわれたか定かでありません（憶えている方は教えて下さい）が、一年生と二年生は聖光庵でした。式で使っておられた紫色の幕で中央を仕切り、東側が二年生、西側が一年生でした。幕は一週間ももちません、幕を体に巻いてつばえるのですから。たらり――。そこで衝立で仕切りです。子どもどうしも丸見え。勿論、声の方もどうしようもありません。自分が習っているところより、隣の方を先に憶えたり習ったり。

朝会は前庭の大きな松の木の下で、朝の歌、体操、注意事項と二年生がきっちりとやってくれました。　体操も一・二年合同で松の木の下、道路、山、原野と広い専用運動場です。

音楽、図工も衝立を取り払っての合同授業、二人教師の複式学級の様でした。

「おい　よう勉強せいや一年が追いつくぞ。」と、二年の男の先生の言葉に、一年生はうれしくなっていたものでした。二年生はいかにも兄らしく、姉らしく、靴の入れ方、学用品の扱い方　掃除の仕方など迚もよく一年生の面倒を見てくれておりました。

役場時代の宿直室だった西側の畳の間ではお母さん方が、月二・三回集まってお華や、お茶を習っておいでした。おじいさん・おばあさんが、よく参観？に来られて入り口の段々に腰をおろして日向ぼっこをしながら話しておられた風景もありました。

川の流れ、道行く人々の話声バスやトラックの走る音を間近かに、耳を、目にしながら事故もなく、嬉々として過ごせた聖光庵教室でした。▲▲

お知らせ

雨傘を利用ください

上町内会

大池バス停留所に緊急用雨傘を用意しています。ご利用ください。

使用後は、元の位置にお返しください。

廃品回収にご協力を

小学校・PTA

三月一〇日行ないます。たくさん出してください。

如水館だより

○野球対外試合案内（同校G）

◆市内四校対抗　一七日九時　◆尾道校　二七日九時　◆秋田能代商　二八日　◆下関中土　二九日　◆三原東　三〇日　九時　◆尾道北　三一日九時　◆沖縄合宿　二一日～二四日

深の歴史（五）

▽享保の大飢饉△

高崎壽郎

享保年間は、昨年放映された大河ドラマ「八代将軍吉宗」が実権を握っていた時代である。深郷土史に、「享保一七（一七三二）年、旱魃で五穀枯死し大飢饉となり、餓死者が出た」とある。

飢饉の原因としては、長雨や洪水、冷害、旱害、虫害などの自然災害により稲作が凶作になったからである。

享保のそれは、西日本を中心にしたもので、旱魃に加えてイナゴとウンカが大発生したため被害甚大で、減収半額以上の藩は四六藩（全国約三百藩）、飢民二百万人（全人口約三千七百万人）。餓死者は一万二千人に達した。広島藩では、二八万人が飢え九七八人が餓死。伊予（愛媛県）の松山では三千二百人の大勢の人が餓死したといわれる。

三原市史の享保一七（一七三二）年凶作の餓死者数書付によると、「深の餓死者は三二人」とある。人口が六百人で二〇人に一人亡くなったことになり、これは近隣の村と比べても飛び離れて多い。深の伝説「稚子峠の赤子石」は、この時犠牲になった子どもの墓ともいわれている。

この年江戸で最初の打ちこわしが起きた。

尚、この頃よりサツマイモの栽培が始まったようで、これがこの後度々おこる天災からいかに多くの民衆を救ってくれたことか。

江戸時代の他の飢饉についてもこの際紹介したい。

次は天明年間（一七八一～八八）全国的な大飢饉が襲来した。天明二（一七八二）年、諸国不作のため、翌年には完全な飢餓状態におちいった。農作物の成育期に当る春夏の候に低温多雨が続いたため凶作となったもので、東北地方を中心に数十万人も死者を出した。

被害が大きかったのは、飢饉が何年にも亘ったからである。藩相互の救援は皆無。人々は、草の葉木ノ実はおろか、木の皮木の根その他あらゆる動植物、果ては人肉まで喰ったのである。東北地方では、生存者なしの村も多かったという。

天明六（一七八六）年、福山藩では、年貢に反対のため一揆がおこった。翌年には米価騰貴し、江戸大坂の町民騒乱の記録がある。

終わりは、天保の大飢饉。天保三（一八三二）年に始まり天保七（一八三六）年に頂点に達した全国的飢饉である。春・夏季おける低温多雨が原因で農作物が大減収となり、特に生産力の低い東北地方では、餓死者や伝染病による死者は無数であった。しかし、天明の飢饉に比べると、備荒施設（社倉）をはじめいろいろな点で飢饉対策が進歩していたので被害はいくらか軽減されたとのこと。

歴史は、天保六（一八三五）年、美濃に百姓一揆、翌年、甲斐、三河、陸奥の農民暴動を伝えている。

県史によると、天保四、七、九、十一年と四回も洪水、旱害、虫害の記録がみられる。久山田史には、天保一一（一八四〇）子年五月「大水、人ながれ、家ながれ、たわかぎりなし」とある。隣接の深もほぼ同じとみてよいと思う。打ち続く天変地異に農民の生活は逼迫し、想像以上の辛酸を舐めたことだろう。

右の享保・天明・天保の飢饉を「近世の三大飢饉」という▲▲

お悔み申し上げます

★福島友江様　八七歳　二月二日

三月町内行事予定

☆小学校

◆廃品回収一〇日◆参観日・期末懇談会一四日◆六年生を送る会一五日◆卒園式一九日◆卒業式二二日◆修了式　三日

☆尚寿会

◆仏経講演会　中旬以降予定

☆女性会

◆親睦会・上二二日・中二日・下一日◆役員会下旬予定

☆消防団

◆機械点検一〇日

☆町内会

◆連合会役員会　下旬予定

◆下町内会役員会　二回予定

展望席

今回は、お金と指導者について考えてみたい。「今の銀行は金の貸方を知らぬ」のだそうな。勿論日常の貸し付け業務はルールに従いきちんと行なわれている。

が、しかし、JUSENである▼かっての銀行は「将来性あり」と見込んだ起業（者）には資金面からバックアップし大きく育てた。今日の担保主義と違った「銀行の見識」が読める▼一方、借りた方も好調時よくある他行の簿手の誘いに乗らず元行の期待に応えた。（この信頼関係は今も変わらぬモラル）我々庶民は「借りたお金は返す」のが当然と思うのだが「住専」をみて、そう考えぬ人がいることを知った。そしてもっと驚いたのは「責任者不在」だった。▼第二次大戦で、唯一人非軍人として絞首刑となった広田弘毅は「自らのために計らず」が信条だった。商社出身で元国鉄総裁　故石田礼助は国会で「粗にして野だが卑はない」と、その心意気を示した。これらに比べ薄汚く、限りなく卑に近い指導者（？）が目につく昨今である